文学のなかの地図

（社）日本測量協会 関西支部 参与　木　全　敬　蔵

東京都立大学で地理学を講じていられる杉浦芳夫先生の著書『文学のなかの地理空間』に触発されることが多かった。杉浦先生の本の内容の一部を紹介する。大岡昇平『武蔵野夫人』のＪＲ国分寺駅周辺の武蔵野台地、はけ、野川などの地理学記載が正確である事を紹介された。また、田山花袋『田舎教師』の熊谷から行田、羽生、田舎教師が勤めた小学校のある弥勒至る道筋にあるマチ、ムラの描写を使って、中心地理論の説明をされた。大岡昇平の書斎には，日本地理学会の機関紙『地理学評論』がぎっしり詰まれていたそうであるし、田山花袋は30代に『大日本地誌』の編纂の手伝いをし、東大理学部で初めて地理学を担当された山崎直方から地理学の研究法を教えられたと言われている。つまり、両人とも地理学に関心持って、且つかなり勉強された方々であったことがわかる。

筆者は某大学で地図学の講義を引き受けたとき、自分が受けた大学での講義は初めから終わりまで投影法だけで、毎時間先生が黒板に書かれる数式を写すことに一生懸命で、まったく学ぶ楽しさはなかったことを思い出した。そこで地図学の時間を楽しめるように、杉浦先生を真似して「文学のなかの地図」と銘打って、地図学の一駒を埋めようと考えた。まず章立てとして、文学を次の４類にまとめた。

Ⅰ類　小説のタイトルに地図または、地図に類する単語が使われている

Ⅱ類　主人公が測量師・地図師

Ⅲ類　文中に地図が小道具として使われている

Ⅳ類　挿図が創作地図又は既製図を利用したもの

上記の分類に従って、ここでは各類１作ずつ取り上げ内容を概説する。

Ⅰ類には平岩弓枝『色のない地図』、須賀敦子『地図のない道』、村上元三『五彩の図絵』、井出孫六『アトラス伝説』等がある。今年は太宰治の生誕100年にあたり、太宰の作品がたくさん復刻されている。そのなかで初期の作品を集め、そのうちの一編の標題「地図」を本のタイトルとしたものがある。“首里の王謝源は、忍耐強く長年月をかけてようやく、石垣島を攻め落とすことが出来た祝いの席で、オランダ人から世界地図を献上された。謝源は早速地図を開き、首里や石垣島が広大な嶋であることを期待して、オランダ人に説明を求めた。しかしオランダ人の答えは、王の支配する嶋は小さすぎて地図に載っていないと言うことであった。謝源は地図にも載らない小さい嶋しか支配できなかったことを恥じ、自暴自棄に陥り、果ては狂い、石垣島の人に復讐された。”があらすじである。イエズス会宣教師が織田信長に伺候したとき、地球儀を使って世界の話しをした記事1）がある。誰が地球儀を信長に献上したかは判らないが、信長は謝源のように怒り狂わなかったのだろうか、世界地図を見た豊臣秀吉は、自分の支配している日本と比べて巨大な隣国を我が物にしたいと言う欲望が湧き上がってきたのだろうか。などと太宰の『地図』は色々な事を呼び起こす効果がある。

Ⅱ類には、カフカ『城』、井上ひさし『四千万歩の男』、吉村昭『間宮林蔵』、前掲の『五彩の図絵』『アトラス伝説』があり、『城』を除いた小説はいずれも実在の人物もしくは実在人物のモデルが主人公なっている。

『五彩の図絵』の主人公は、遠近道印の孫玄武道印とその弟子米沢藩士春日今之助である。
遠近道印は実在の人物で、「江戸大絵図」「東海道文献絵図」に関与したことで著名な江戸期の測量人の一人であるが、その実像は不明で、遠近道印

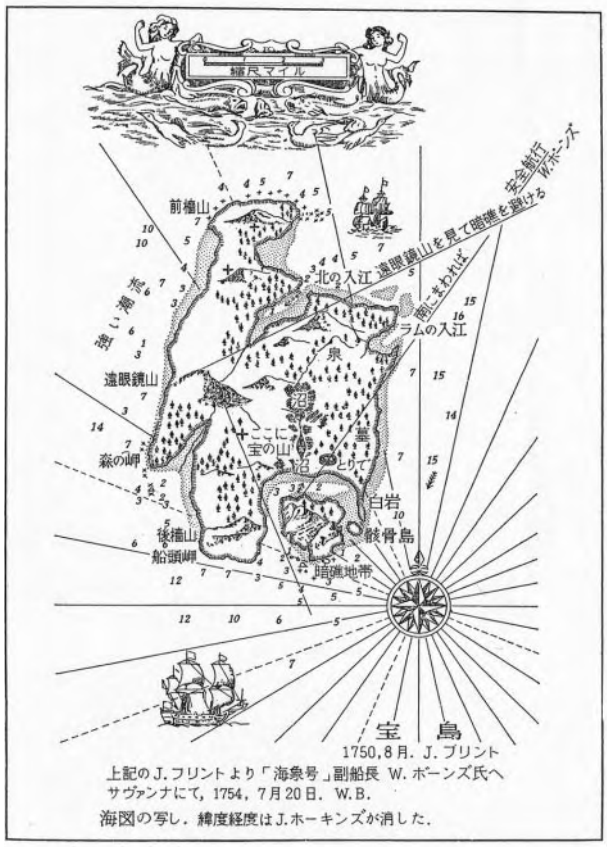
は誰のことかと長い間、古絵図研究の世界で話題になっていた。近年遠近道印は富山藩医藤井半知であるという深井甚三の説で落着したように見えたが、ある地図学研究の大御所の反対で、遠近道印はいまだ謎ということになっている。春日今之助は、代々米沢藩の「御絵図方役」を勤めた岩瀬家2）の小右衛門と言う実在の人物をモデルとしたと推測できるが、玄武道印は作者の創作であると思う。

Ⅲ類の例は、今のところ、森鴎外『青年』の他に例を知らない。『青年』の書き出しは「小泉純一は芝日陰町の宿屋をでて、東京方眼図を片手に人にうるさく問うて、新橋停留場から上野行きの電車に乗った。」で、東京方眼図は森鴎外が考案したものであり、現在ではごく当たり前になっている検索用の方眼がかけられて、縦は右から左へ**い**から**ち**までの5列、横は上から下へ漢数字で**一**から**十一**まで11行になっている。小泉純一が尋ねようとしている知人の下宿付近の目標物である根津神社を索引を使って探し当てた。訪ねた友人は外出中なので、帰るまでの暇つぶしに近所を歩いていると、“竿と紐尺とを持って測地師が土地を測るような小説や脚本を書いている”鴎村（鴎外がモデル）の家の前を通った。何かと比較される夏目漱石も風景描写が巧みだが絵画的で、鴎外は地図的であると言われている。つけ加えると小泉純一が垣間見た家は、鴎外の観潮楼がモデルである。

森まゆみ『鴎外の坂』新潮文庫　2001より

Ⅳ類の小説には、スティーブンソン『宝島』、アガサクリスティー『白昼の悪魔』、安部公房『燃えつきた地図』などがある。

『宝島』の地図は、筆者が眼にしたものに3種ある。岩波文庫と尾崎幸男『ファンタジア・サルヴェア』と武藤勝彦『地図の話』である。岩波文庫図と武藤図は、図柄が同じであるが、武藤図は注記が英文のまま、岩波文庫図は日本語に翻訳されている。尾崎図は前二者と図柄が異なり、注記も英文と日本文が半々になっている。尾崎の見積もりによると、三角測量10点、図根点測量20点、地形測量30km^2、水深測量延長20kmをして合計8350万円になる。この本は、昭和46年から日本測量協会の月刊誌『測量』に連載されたのを纏め、西尾元充氏が主宰していた画像工学研究所が出版したものである。昭和46年は1981年であるから、今から28年前の見積もりということになり、現在の物価水準から類推すると軽く1億円を超えるビッグプロジェクトだったことになる。挿図に使われた地図の役割は物語のイメージを立体化することにある。ノーベル賞作家の大江健三郎は、幼いころ母親から与えられた『ハックルベリフィンの冒険』を熟読したことが、その後の人生に大きく影響したと、彼の作品のなかでのべている。長い間地図・測量に関わってきたことにより、外に出れば地図を頼りにし、小説を読めば背景の理解



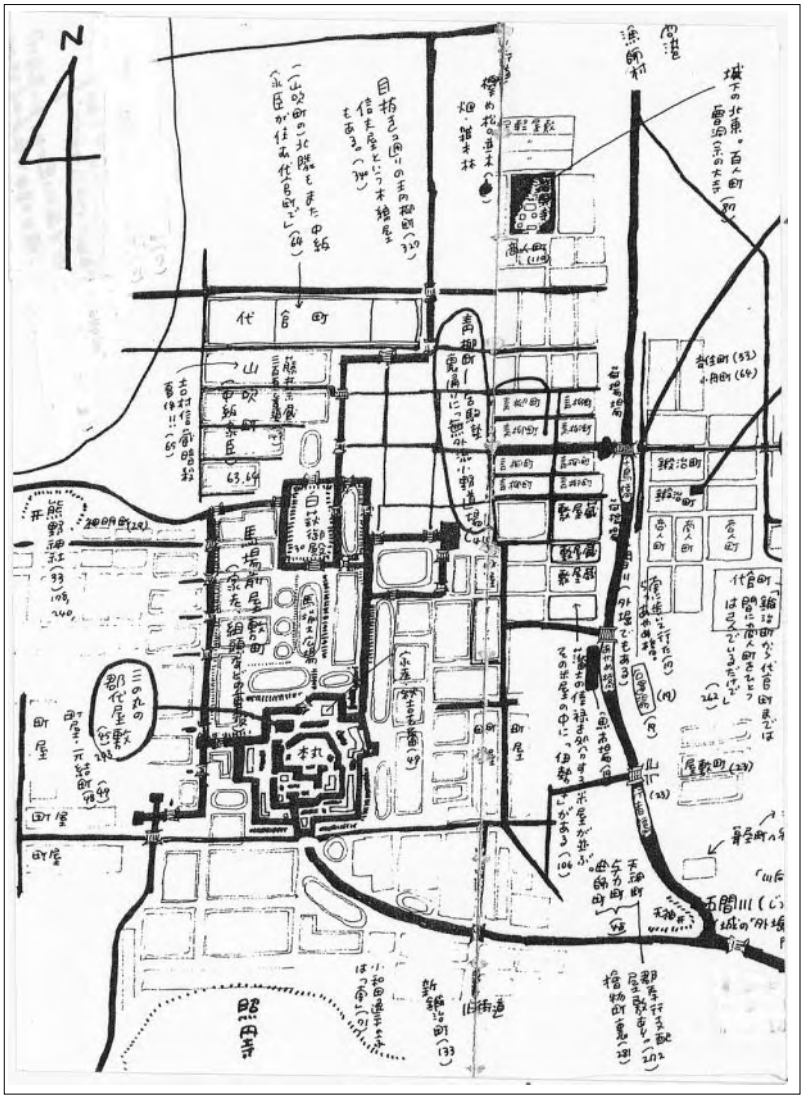
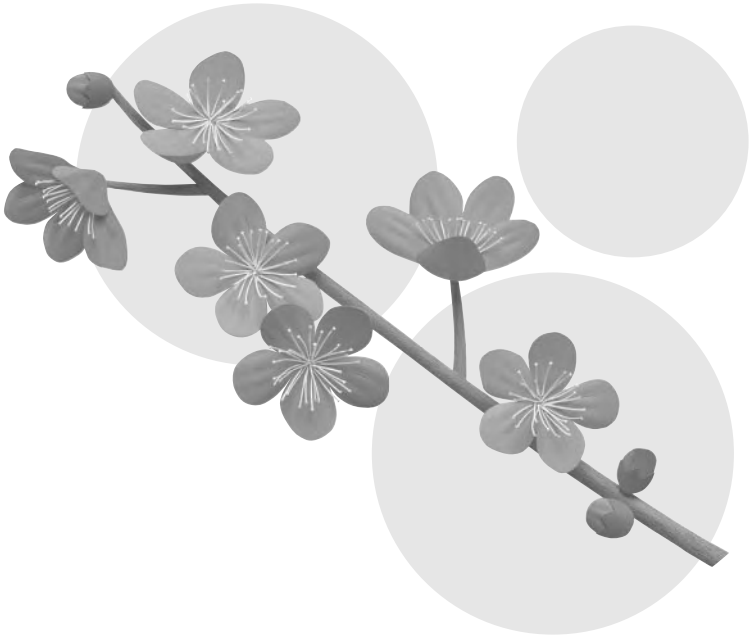
スティーヴンスン『宝島』岩波文庫　1963より

に地図を求める習性が身についてしまって、ミシシッピ川を延々と下る『ハックルベリフィンの冒険』には、地図が添えてないため、面白さが半減し、大江健三郎ほどの感動は無い。

小説の挿図ではないが、文芸春秋編『藤沢周平の世界』に掲載された、井上ひさし制作の「海坂藩城下図」は最も気に入っている創作図である。

『蝉しぐれ』の舞台になった海坂藩の城下町と郊外の様子が地図に仕上がっていて、『蝉しぐれ』を読んだときに浮かんだイメージ、テレビドラマの映像の記憶などを鮮明に思い出させる傑作であると思っている。

1） 織田武雄『地図の歴史』講談社
1973　p.224
2） 矢守一彦『都市図の歴史日本編』
1974　p.109



井上ひさし制作「海坂藩城下図」の部分図
文芸春秋編『藤沢周平の世界』文春文庫　1997より